



▲障子の張り替え（印旛郡栄町）（個人蔵）

■1枚の写真から見た昭和30年代

この写真は、昭和30年代後半の年の瀬の風景です。

母親はモンペに割烹着（ウワッパリ）を着けて、木箱の上に障子を載せて残った古い障子紙をきれいに取り除いています。間仕切りとしての障子とふすまはどこの家にもありました。

この家では、廊下との仕切りに障子が使用され、畳の間の仕切りはふすまが使われています。

この後の障子張りを想像してみましょう。ぬれ雑巾で丁寧に棧（さん）を掃除し、刷毛でのりを棧に塗布し、新しい障子紙を張ります。のりは小麦粉の他、ご飯をペースト状に煮たものをよく使用していました。庭には自転車が停められています。当時の自転車は頑丈で、乗り物だけでなく運搬具としても活躍していました。荷台に大きな荷物を載せるだけでなく、リヤカーなども引きました。サドルの下の三角のフレームもこの時代の特徴です。子どもたちは、この大人用の自転車の三角フレームに右足を入れてペダルを半回転させながら進む「三角乗り」をしていました。

住まう